

## 「嵐の前」と「リシニウス」

長 繩 光 男

一八四八年に西欧の思想界は重大な転換期を迎える。しかし、西欧を席捲した革命の大波にとつて、ニコラ一世の統いるロシアは強固な堤防であった。それゆえ、この年はロシア本国の思想界に関する限り、西欧の場合ほど直接的に深刻な打撃を与えないものではなかった。だが、ここに、二月革命とそれに続く一連の出来事を逐一目撃し、その意味を全身で受けとめた一人のロシア人がいる。アレクサンドル・ゲルツェン (Александр Иванович Герцен 1812—1870) である。

ゲルツェンの唱えるロシア社会主義の教説が四〇年代のロシアの思想界を二分した西欧派とスラブ派の統一であることが指摘されてからすでに久しい<sup>(1)</sup>。また、ロシア思想の向後の展開に對する彼の足跡の巨きさに思い到时、彼に深甚な影を落した四八年は、I・パーリンの説くのと別の意味において、ロシア思想史の上にも転機をもたらす年であったと言えるだろう。それゆえ、ゲルツェンの四八年前後の思想状況を解明することは、彼の思想形成過程をみる際に不可欠であるばかりか、ロシア思想史全体への展望を開く上にも大きな意義を有するのである。

う。

二月革命前後のゲルツェンの像については大雑把に見て二つの見解がある。その一つはおよそ次のようなものである。

四七年一月ゲルツェンがロシアを出た時、西欧、とりわけパリは彼にとって約束の地、憧れの地であった。がパリに着く早々、彼はその地のブルジョア文明の偽善性に失望し、数ヶ月後にローマに向けてパリを去る。そこでイタリアの解放運動に接した彼の心には、西欧の革新性への期待が再びよみがえる。そんな時、パリから共和制樹立の報が入る。彼は勇躍パリに戻る。が、共和制の夢はつかの間にして消え去る。一八四八年五月一日の事件、六月の日々<sup>(2)</sup>と続き、ゲルツェンの革命は完敗する。彼はそこで精神的破産 *Трагический крах* をこうむる。そこで家庭内の不幸——これと並行してルイ・ボナパルトの反動攻勢が進む。西欧文明の再生に完全に絶望した彼は、やがて、ロシア農村共同体を基礎とした社会主義を信ずることにより、精神的に祖国に復帰することになる。

論者により個々の時点での彼の思想の評価、意義づけに差があるとはいえ、従来はこうした見方が通説であったといつてよい<sup>(3)</sup>。ところがここにもうひとつ別の見方が提示されている。M・マリアの所説がそれである<sup>(4)</sup>。

マリアは先にみたようなゲルツェン像にわずかの真実しか認めず、大半を神話にすぎないと断じている。彼によれば、西欧に對するゲルツェンの幻滅は決してヨーロッパとの出合によつて惹き起されたものではない。従つて二月革命の挫折は彼の精

神に決定的な破滅を与えたわけでもない。西欧への幻滅はロシアに在る時からすでに決定的であった。そして二月革命の事態の進行は、これまで徐々に形成されて来ていたロシアの未来への信念、——多分に無政府主義的・社会主義の性格をマリアは強調している——の定着を促進するものだった、というのである。今ここで二種のゲルツェン像を詳細に検討するゆとりはないが、問題点のみを整理すれば次のようにならう。

- (1) 四七年一月の前と後でのゲルツェンの思想における change と continuity はどうか。
- (2) イタリアでのゲルツェンのオブチミズムの意味はなにか。
- (3) 二月革命の推移に伴い、西欧社会・文明に対する批判の観点はどのように変ってゆくか、あるいは変らないか。

本稿は、右に挙げた三つの問題点のうち、第一点を念頭におきながら、四七年一月、革命前夜に書かれた「嵐の前」をとりあげ、そこにおける歴史観の continuity を探ろうとするものである。許された紙数の関係上、課題はさらに限定され、「嵐の前」と、三八年の作品「リシニウス」の思想の類似点を指摘することとどめるをえなす<sup>(9)</sup>。

- (1) С. М. Иванов-Разумник, *Нечерная Русская одиссея* (Трава xi Трехен)
- (2) see: Isaiah Berlin, "Russia and 1848," *Slavic and East European Review*, Vol. 26 (Apr. 1948), pp. 341—

360.

- (3) ここでは主にユリスベルクを代表とするソヴァイエト史家の見解を念頭においている。(С. М. Флоренберг, *А. И. Тегуев, жизнь и творчество*, 2-ое изд., Москва, 1951.) マリア以前の西欧の研究者も基本的にはこの像を承認している。例えば R. Labry, *Alexander Ivanovitch Herzen, Etude sur la formation et le développement de ses idées*, Paris, 1929, ラブリーはこの中でゲルツェンの歴史観が革命前にすでに確立していたとしている。(ibid., p. 318)
- (4) Martin Malia, *Alexander Herzen and the Birth of Russian Socialism, 1812—1855*, Harv. Univ. Press, 1961.
- (5) ibid., p. 336.
- (6) 私はこれまで、ゲルツェンの文学作品を取りあげ、登場人物の検討を通して、彼の倫理観にアプローチしてきた。この問題関心は今も変わらない。従って、先に整理した問題点を逐一論ずることは、人間ゲルツェンのドラマを追求するためのものとしてなされることになるであらう。

ゲルツェンに「向う岸から」と題する著作がある。これは、二月革命の進行と相前後して書かれた八つの評論を集録したもので、同時期に書き継がれた「フランス・イタリアからの手紙」と共に、彼のオリジナルな思想のみらられる書としてその評

価は高い。「嵐の前」はその冒頭の章を構成している。

一八四七年一月、パリを去りローマに向う途中ゲルツェンはモスクワ大学時代の友人ガラホーフ (M. II. Galatsov) に会う。「嵐の前」はこの時の論争をもとにして、同年二月ロームで書かれたものである。以下、内容に則して、本章にみられる、ゲルツェンに特徴的な思想を要約しよう。

現実に対する姿勢の問題が対話の発端を形作る。「私は生が与えることの出来ないものを与えてくれないといつて腹を立てるのをやめました」(VI. 19<sup>(2)</sup>)と語るゲルツェンに対し、ガラホーフは次のように反駁する。「私は怒り苦しむことをやめようとは思いません。これが人間的権利である以上、私はそれを捨てようとは思いません。私の怒りは私の抗議です。私は妥協したくはありません。」(VI. 20)

現実と理想のかかわり合いの問題は永遠の問題であろう。理想を高く掲げその純潔性を保持しようとする余り、現実を顧みることがなかったなら、その理想は空論でしかないだろう。かといって、高邁な理想を捨て、現実の肯定に安んじたとしたら人生は卑小なものに終るに違いない。ロシア文学が繰り返して問うて来た「余計者」のテーマはまさにこうした問題を巡っているのである。四〇年代半ば、「誰の罪か？」の中でゲルツェンが提示したペリトフの形象も、理想と現実との乖離に悩む「余計者」の一典型であった。

もとより理想と現実とは二者択一の問題ではない。しかし、ガラホーフの姿勢が理想主義であるのに対して、ゲルツェンのそ

れはより現実主義的である。ゲルツェンは現実を無視した理想が空虚空論に終る危険性を指摘する。怒りは確かに「人間をして行動に、活動にかり立てる強烈な酵母」(VI. 21)ではある。しかし、理想に固執する余り、怒りが現実を軽蔑し、無視することになるなら、現実からの逃避と同じことになるだろう。現実が理想にそぐわないゆえにそこから超絶しようという志向に、ゲルツェンは「臆病」すらみる。「眞実を知ることの怖しさゆえに多くの人は分析よりも苦悩を好む」(VI. 20)と彼は語る。

では、ゲルツェンにとって眞実とは何か。それは自分たちの生きていく世界が死につつある、ということである。そして「どんな妙薬といえども腐り切ったその身体にはもはや効きはない」のである。(VI. 22)彼は更に続ける。「後から来る者が容易に呼吸できるように、それは葬られねばなりません。」(VI. 22)

古い世界の克服は新しい時代のための新しい原理によってなされねばならないであろう。だが、彼は、自分たちが古い概念から自由でないことを認めざるを得ない。既成の概念の根底に横たわるものは、彼によれば、「心情にとってのロマンチズム」、  
「理性にとっての観念論」である。この二つの「旗印」の下に進んだ文明は「粗野な民衆を離れ客間やアカデミーや書物の中に遠ざかっていった」のである。(VI. 23)「私たちの生活における混乱の大部分はまさにここから生じているのです」とゲルツェンは述べる。つまり、現実に対する理論の無効さ、思索家

と大衆との隔絶は、ロマンチズムと観念論に由来している、とゲルツェンは考えるのである。現代のこの不幸を解消する道は、既成の概念の上に組み立てられた理想を捨て、目の前にある世界の実体を偏見なく直視すること以外にないだろう。「先祖の寸法に合せて仕立てられた」衣服を脱ぎ捨て、「過去の環境の下に形成された」大脳を作り変えねばならないのである。(VI. 25)

だが、そこから出発すべき現実の世界は死につつあり、これを救うことは彼にとつては全く無意味であった。さりとて、新しい時代の訪れは遠い。こうした過渡期感が先にみた現実主義的志向と結びついた時、ゲルツェンには未来に託した夢の中に慰めを見出すことはできない。彼は断定する。「新しい世界が私たちの計画通り建設されると考える理由はありません。」(VI. 25) ここから、ゲルツェンに特徴的な歴史観が開陳されることになる。

現在を生きるわれわれが現在を作っているように、未来は未来の人々が作るだろう、と彼は考える。とすれば、現在と未来とはどの様な関係をもつか。「未来は存在しません。」(VI. 32) とゲルツェンが書く時、その答は明白であろう。すなわち、両者はお互い同志にアブリオリな意味をもってはいない、と彼は考えるのである。更に曰く「それ(II 未来)を作るのは偶然的・必然的な何千もの原因の総和、予期せぬ劇的終局、芝居の山をもたらず人間の意志なのです」(VI. 31—32) 未来の像は現在においてすでに決定されているのではない、しかもそれは

人間の意志を離れたところで決められるでもない、——これは目的論の否定であろう。ゲルツェンは書いている。「歴史においては何が即興詩です。全てが意志です。全てが *ex factis pro* なのです。」(VI. 36) このように書くことによりゲルツェンは決定的に主観主義の立場に立つことになる。歴史に人間の意志とは無縁な目的を認めるとすれば、それは歴史を神学化するに等しいだろう。「目的論——それは神学に等しい」(X. 199) とゲルツェンは語る。

目的論の否定は進歩主義の否定である。彼は、目的論に即しての進歩をあたかも至上命令の如く考え、現在の人々を犠牲にして顧みない教説や、実現不可能な未来への夢をふりまく理論に対して抗議する。「進歩が目的であるとすれば、我々は誰の為に働いているのでしょう」とゲルツェンは問う。「無限に遠い目的は目的ではありません、トリックです。」(VI. 35) 歴史に目的があるとすれば、それは「あなたと私」であり「存在するあらゆるものの現在」である。「そこにこそ、全てが包含されているのです。」(VI. 33) ゲルツェンはまた「各世代にとつての目的はその世代それ自身です」とも書いている。(VI. 35) すなわち、彼にとつて歴史は、そして世界は、そこに生きる個々の人間にとつてのみ意味をもつのである。歴史上のひとつの時期が他の時代の手段や目的でなかったのと同様、そこに生きる人間も歴史の何らかの目的の手段ではない、彼らの生に目的があるとすれば、それは彼ら自身の生だ、とゲルツェンは考えるのである。さればこそ彼は、「生を、現在を享受しなければな

らない」と説くのである。(VI. 38) 未来の建設は未来の人々に任せておけばよい。われわれに出来ることは、今ある生を全うすることではないだろう。「自分自身を救うことによって、あなたは未来を救うことになるのです」(VI. 27) とはこの意味である。そして、この言葉の中に、ゲルツェンの歴史観の核心があると云えないだろうか。

(1) この会話のプロトタイプはすでに「続・一青年の手記」(一八三九年)にみられる。そこでは「私」がガラホーフに、トレンジンスキーがゲルツェンに対応している。(C. M. I. 300—315)

(2) 引用文末尾の括弧内はゲルツェン三〇巻著作集の巻数とページ数を示す。

(3) 社会改革と思想改革のうち、ゲルツェンがどちらをより規定的に考えていたか、速断は許されないが、短篇「クルーポフ博士」(四六年)や論文「様々な動機について」(四五年)「古いテーマの新しいヴァリエーション」(四六年)などを検討することにより、この問題の解決に対する何らかの示唆が得られるのではないかと思う。

(4) 即時に、用意なく、(ラテン語)

(5) 具体的にはヘーゲル主義であり「空想的社会主義」である。しかし、ゲルツェンがいつヘーゲルと訣別したかについては自ら別問題である。

二

右に要約したゲルツェンの歴史観を特徴づけるものは主観主義であるといってよいであろう。そして、これは、例えば「名譽の歴史的發展に関する若干の考察」(四六年)などにみられる個人主義<sup>(1)</sup>と密接に結びついている。

一体、ゲルツェンのこうした歴史観の芽はどこにあるのか？ われわれの考えによれば、それは一八三八年の戯曲「リシニウス」(あるいは「ローマの舞台から」)の中にあるのである。

一八三五年ヴャトカに流されていたゲルツェンは、自由主義詩人ジュエーコフスキーのはからいにより三八年一月ウラジーミルに移り住むことを許される。「リシニウス」はその年の秋、この地で書かれたものである。

当時ゲルツェンは歴史研究、とりわけ古代ローマ帝国の没落とキリスト教世界の誕生をテーマとした歴史研究に関心を示している。彼はこの研究を通して、自分の生きている時代の意味とその未来を探ろうとしていたのである<sup>(2)</sup>。この研究の成果のひとつが「リシニウス」であった<sup>(3)</sup>。物語の舞台に古代ローマ帝国後期を探るのは、彼がこの時代と自分の時代との間に共通点を見い出しているからである。すなわち、彼は自分の時代を大いなる過渡期として把握しているのである。そして、彼は古い社会の中で、新しい理念を求めて苦悩する人間に深い共感を寄せた。主人公リシニウスは多分にゲルツェン自身でもあったのである。

ドラマはリシニウスと友人メビウスとの対話の形で進められる。時はネロの治世。貴族の間には、かの暴君を倒し、ローマ

の再建を計ろうとする策謀がめぐらされている。メビウスはその有力なメンバーであった。だが、リシニウスはこの密議への積極的参加者ではない。それは、彼がローマが最早回復困難なほどに腐り切っていることを認識しているからである。栄華を誇ったエジプト帝国の残骸を目のあたりにした彼は、ローマの永遠性にも疑念を抱かざるをえない。「そこに群がり働いていた民はどこにいったのか、——とリシニウスは語る——……人々や帝国やけだものや、思想や行動など過去はどこに流れおちてゆくのだろうか。クロノスはあくことなきどん欲さをもって喰いつづける。彼には内臓などないのだ……。」(T 188)

他方、メビウスは作者によれば「おのれの世紀の観念の限界をふみこえようとする人間」(T 188)ではなかった。素朴にローマの永遠性を信じていた彼はリシニウスの指摘により、自己の信念に疑惑を抱かされながらも、最終的にはリシニウスの考えに組みすることは出来ない。彼はリシニウスに反駁して語る。「帝国は人間の手になるものです。だから滅びる。しかし、永遠に若い生命はそれらの廃墟の上に花を咲かせるだろう。」(T 188)「自然に滅」はない。宇宙は永遠である。「世代を新たにしつつ世界は生き続ける」のだ。(T 188)

メビウスのオプチミズムが生命の永遠性への信仰に由来しているとするれば、リシニウスのベシミズムは生命の有限性への認識に由来していると言えよう。ところで、前者の賛美する生命とは生命一般であり、それゆえ抽象的生命である。そして、これは自然、宇宙として永遠に存在し続ける。こうしたものと

しての生命を信ずるがゆえに、メビウスは時間トクメの破壊力への恐れから自由なのである。だが、リシニウスの見る生命は個々の生命である。つまり、草木の生命であり、個々の人間の生命であり、更に人間の作り出したあらゆるものの生命である。これらはいずれもクロノス神の前では無力な存在でしかない。しかし、彼にとって、この世で最も意味あるものは、他ならぬこうした個別的生命、とりわけ個人の生命なのである。抽象的生命の永遠性は、その中でいつかは滅びるべく運命づけられた個々の生命にとって、一体どんな意味をもつというのか。リシニウスリゲルツェンはメビウスに抗議する。「いや、僕は個々人の生命の方があらゆる自然よりも重要だと思う……人間の涙の一滴、くるしみのひとつひとつが僕の心に響くのだ。生命についての何やら抽象的な観念のために、何のあわれみもかけずに人々を犠牲に供するとは非情だ。」(T 188)「このような犠牲を許容する宗教や哲学を彼は肯定することができない。が、彼にはそれに変る新しい原理を見出すこともできない。「人間は神に結びつけられ、神の中に安らぎ、愛によって神にまで高まるべきだと僕は感じているのだが。どうやって？——分らない。どうやってたらよいか僕には分らないのだ。だからこそ僕は悩んでいるのだ。僕は探し求めている、待っているのだ。——」(T 189)かくて活動への志向に燃えながら為すことを知らない主人公を作者は次のような悲痛な独白へと導く。「未開人から先の世代にいたるまで、あらゆる時代には何かすることがあった。今は何も為すことがない。……やがて新しい世代が登場す

るだろう。彼らにはきつと信念もあり、希望が明るく彼らを照らし出し、幸せが花開くことだろう。だが、われわれは——過去からあらわれ、未来には到達することのないつなぎの環だ。われわれには——暗黒の夜が、入日の最後の光も消えはて、東方にはまだ明るい光のさし来たらぬ、そんな夜があるだけだ。来たるべき幸せな人々よ、君らには何も為すことのないことほどじめなつらい苦しみはないのだということが分らないだろう。」(I, 104)

彼はやがて年若くして他界する。が、すぐにパウロの秘蹟によみがえり、彼に従って伝教の旅に上るのである。

(1) その中でゲルツェンは次のように書いている。「たしかに個人は——歴史的世界の真の頂点である。すべては個人にむすびつき、個人によって生きる。個人なき普遍は空虚な抽象である。」(II, 155) しかし彼はまた次のようにも付加している。「だが個人はそれが社会の中にある程度に依じて、その十分な現実性をもっているにすぎない。」(II, 155)

(2) この頃、彼は私信の中で「今世紀は過去と未来の間のいかなる連結環をなしているか」についての論文を書こうとしていたことを告げている。(XXII, 38)

(3) もうひとつの成果は「ウィリアム・ハン」である。

### 三

リシニウスとメビウスの対立関係を「嵐の前」におけるゲルツェンとガラホーフの関係にそっくりそのままおきかえること

が出来ないことは言うまでもない。何よりも、ガラホーフの心境にメビウスのオプチミズムはひとかけらもない。また、メビウスはローマの改革への積極的な挺身者であり、他方、ガラホーフは現実からの超絶を保とうとしている。また、無為をかこつ主人公を秘蹟によりよみがえらせ、新たな時代に生きさせるあのロマンチズムは、九年後のゲルツェンには全く無縁であった。

しかし、終幕近くのリシニウスの独白にみられる時代把握は、自らの生きる世界を回復困難な瀕死の世界として捉える「嵐の前」の認識と同一である。ゲルツェンに終生つきまとうベシミズムはこの過渡期感と深く結びついたのである。また、生命の有限性を痛切に認識しつつ、それゆえにこそ一回かぎりの生命に愛着を寄せるリシニウスの中に、「一人の人間の死は人類全体の死滅に劣らず不条理なことです」(VII, 155)と断言する「嵐の前」のゲルツェンを予測することは容易であろう。

リシニウスの復活が現実にはありえない以上、生身の人間としてとるべき最善の道は、徒らに未来の夢を追うことではなく、「現在」を精一杯に生きることであろう。四二年半ば、ゲルツェンは二度目の流刑地ノヴゴロドで、次のように書いています。「生を深く凝視するなら、勿論、より高い善は存在それ自身である——外的情況がたとえどんなものであろうとも。このことを理解するなら、この世の中で未来のために現在を無視することほど馬鹿らしいことはないということもわかるだろう。現在は存在の現実的領域である。あらゆる瞬間、あらゆる楽しみを

とらえねばならない。心はたえず開かれ、満たされ、身の辺りにあるすべてのものを吸いこみ、その中で自らを満たさねばならないのだ。(II. 217) 更に四四年一月の日記には次のようにみえる。「現在に對する驚くべき無関心は、我々をして失われたものを思い返すことだけを可能にしている。もとより、可能性や偶然性の極端な思想を遠ざけることは困難ではあるものの、何のために、ありもしないこと、ありえないことを予見・予測しようとするのか、これは一種の Gruberei (思いわずらうこと) というものだ……。観念論者は(現世の)福祉 Glaro のはかなさゆえに、それらを無視することが必要だと結論づけるのである。」(II. 393—394)

これら二つの日記の断片に共通した「現在」へのこの種の関心は、時間の威力を認識し、なおかつその中で個別的生命の意義を主張したリシニウス・ゲルツェンの志向からする当然の帰結であったといつてよいだろう。そして、これらの断片にみられる思想が、未来への信仰を拒否する「嵐の前」の主観主義的歴史観へと連なるのである。

(1) 日記からの引用に関してはラズムニクの論文「ゲルツェンの歴史哲学」から示唆を受けたことをお断りして置く。(С. М. Иванов-Разумник, 'Философия истории Герцена', 1908—В кн.: Д. И. Теруев, Петроград, 1920, стр. 167.)

(2) 彼における「現在」への志向は、決して未来への献身と両立しないものではない。例えば、彼の日記には次のように認められる。「現在をつかまえること、至福に對するあらゆる可能性を自己のうちに、有効に創出すること——私はこうしたことを一般的活動の意味で使っている……」(II. 394—395) すなわち、ゲルツェンにとって、「現在」の自己の生を真に充実させることは、普遍的課題に自らを結びつけることによつてはじめて可能なのである。

(3) 「リシニウス」と「嵐の前」結核四〇年代の思想遍歴については他日の課題として残すことにした。

(付記) 最近「向の岸から」に於いて研究書が出た。ナン・マコーネルの博士論文である。(Allen McConnell, *Against All Idols: Alexander Herzen and the Revolution of 1848*; Submitted in Partial Fulfillment of the Requirement for Ph. D. in the Faculty of Polit. Science of Columbia Univ. Apr. 1954. Univ. Microfilms, Axerox Company, Ann Arbor Michigan) しかし未見である。また、ゲルツェンの歴史観についてロマンの論文も読む機会をもてなかつた。(Иппер Л., *Мировоззрение Герцена, историко-философский очерк*, Москва-Ленинград, 1955) それゆゑ本稿は試論の域を出るものではない。

(一九六八・九・二〇)(一橋大学大学院博士課程)